【資料】

大学入学者選抜改革における「徳島方式」の事例

植野美彦，澤田麻衣子
（徳島大学総合教育センターアドミッション部門）

徳島大学では，中央教育審議会答申（2014）及びその翌月に策定された高大接続改革実行プラン（2015）を受けて，2016 年 4 月に設置した生物資源産業学部で多面的・総合的評価に伴う個別選抜改革を実施した。「徳島方式」は，生物資源産業学部を実証の場と位置づけ，全学展開し，本学における入学者選抜改革の遂行を目的とするものである。本稿では，「徳島方式」の定義，そして全学展開した工程などの具体的な内容を明らかにし，高大接続システム改革で示されているアドミッション・ポリシーに基づいた大学入学者選抜改革の事例として報告する。

1 「徳島方式」とは

1.1 アドミッション・ポリシーと「徳島方式」の定義

我が国で初めてアドミッション・ポリシー（以下，AP と略す）が提言された中教審答申（1999）以降，個別の大学で AP が策定されて来たが，AP の実質化という観点においては，課題が指摘されてきた。西郡（2014）は，AP は抽象的な表現が多く具体性が乏しく，実質的な活用に向けた見直しの必要性が問い直されていると述べており，立脇ほか（2015）は，AP が形骸化せず，入学者選抜に機能するためには，学生が必要と考える「情報」を大学教員が理解する必要があることも指摘している。

「徳島方式」[1]は，新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた改革を行うため，本学の教育方針を踏まえ，入学者に求める能力及びその評価基準・方法を明確にした AP に基づき，公正な入学者選抜を実施するものである。本学生物資源産業学部を「徳島方式」における実証の場と位置づけて，入学志願者の資質や適性を多面的・総合的に評価する AP に基づいた入学者選抜を先行実施した。当学部は，個別選抜改革において，受験生や高等学校に説明責任を果たせる AP の設計に最も力を注ぎ，「選抜方法と求める人物像の関係性」をマトリクス形式で示した（植野，2017）（図 1）。さらに，選抜方法や選抜内容も明確化し，受験生の視点に立って，AP に示したことも特徴である。

本学では，生物資源産業学部の AP をモデルとして，アドミッション組織，そして全学部と連携の上，AP 具体化の全学展開を試みた。今回の試みは，AP 具体化に加えて，現行の選抜と AP との整合性が担保されているかの確認工程も同時進行させている。この「徳島方式」は，全ての学部・学科・専攻の AP（以下，学部 AP と略す）を実質化させることに意味をもっている。

横軸：重点評価項目＝求める人物像（AP）

学力の３要素を網羅

縦軸：選抜方法＝多面的・総合的評価

選抜の細分化

	関心･意欲･態度	探究力	表現力	知識･教養	思考力･判断力	協働性
(センター試験)				○	○	
総合問題		○	○	○	○	
集団討論			○		○	○
集団面接	○		○			
個人面接	○			○		
調査書	○					○
活動報告書	○					○
学びの設計書		○	○			

図１ 本学生物資源産業学部における選抜方法と求める人物像の関係性（2018 年度入試）[2]

1.2 全学部における AP 具体化

全学部における AP 具体化においては，筆者が所属する総合教育センターアドミッション部門（以下，アドミッション部門と略す）の専任教員と兼務教職員によって，表 1 で示す工程表に基づいて実施した。

表１ AP 具体化に関する工程表

年月	内容
2015.8	生物資源産業学部　設置認可
2015.9 ～	アドミッション部門専任教員と入試課にて，生物資源産業学部 AP をベースにした AP 具体化に係る基礎資料，全学 AP 初案等を作成
2015. 10	アドミッション部門会議で AP 具体化の提案と意見交換　→　各学部持ち帰り検討 ※アドミッション部門会議における構成員 ・アドミッション部門専任教員 ・各学部，全学共通教育センター[3]兼務教員 ・学務部入試課長　以上，当時 9 名

2015.11	アドミッション部門会議で AP 具体化に係る各学部意見集約　→AP 具体化を大筋合意
2015.11 ～ 2016.3	アドミッション部門専任教員と各学部兼務教員による，個別ヘッドワーキング実施 ※学部・学科別に渡って個別実施
2016.3	学部・学科（専攻）単位の AP 具体化案提出
2016.4	教育担当理事（総合教育センター長を兼ねる），アドミッション部門長，学務部長，入試課長を中心に，全学 AP 最終案作成
	アドミッション部門より，全学入学試験委員会に AP 具体化案提出　→ 承認
2016.5	役員会，教育研究評議会で AP 具体化案承認
2016.6	AP 具体化を本学 HP で公表

実施にあたり，アドミッション部門では，入試課と連携し，生物資源産業学部における AP のベースとなった図 1 を中心とする基礎資料，全学 AP 初案，具体化マニュアルを作成した。基礎資料を検討する中で考案した「AP 作成シート」は，AP 具体化において，各学部で活用されているものである。本シートについては，**2.1** で具体的に示す。

学部 AP を示す前に，全学 AP に触れておく。全学 AP においては，本学の理念・目標，そしてカリキュラム・ポリシー（以下，CP と略す），ディプロマ・ポリシー（以下，DP と略す）との関連性も踏まえ，学部 AP を集約して「簡潔に」表現することとした。策定したものは，図 2 の通りである。なお，全学 AP と学部 AP は，「『卒業認定・学位授与の方針』（DP），『教育課程編成・実施の方針』（CP）及び『入学者受入れの方針』（AP）の策定及び運用に関するガイドライン」（2016）が示された後に，公表したものである（AP 具体化と同時進行で，平成 28 年 4 月に本学の新 CP・DP を公表している）。

図 2 内にある「求める要素」は，学部 AP に記載した「求める人物像」の全観点を集約したものである。学部 AP の策定にあたっては，図 3 の内容を網羅させたのち，具体的な学部 AP を展開することとなった。図 3 で示す内容が，学部 AP の構造となり，全学部ですべて統一を図っている。この構造は，生物資源産業学部の AP と，2015 年 3 月に文部科学省大学入試室から公表された「現行の大学のアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）に関する資料」，いわゆる「AP 事例集」の巻頭に示されている「アドミッション・ポリシーに盛り込むべきポイント」が基盤となっている。

●全学の受入方針

徳島大学は，その理念，目標，学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）のもと，卓越した学術及び文化を継承するとともに学びの志と進取の気風をもち，未来へ飛躍する人材を養成するため，課題に対し自ら積極的に取り組む主体性，社会の多様性を理解できる能力，協働性をもった，次のような人を求めています。

●求める人物像

・多様な情報に関心をもち続け，自らの自由な発想でその真偽と活用を主体的に判断しようとする人
〔求める要素：関心・意欲・態度，思考力・判断力，主体性，応用力〕

・本学の専門分野を学ぶために，高等学校等で修得すべき文科系・理科系に渡る知識・教養のもと，思考を深めて相手に表現できる人
〔求める要素：知識・教養，思考力・判断力，表現力〕

・自律して社会や地域の諸問題に意欲をもって立ち向かい，その課題解決策を深く掘り下げて伝えようとする人
〔求める要素：関心・意欲・態度，探究力，表現力〕

・他者の意見を真摯に受けとめ，協働して国際社会や地域社会の発展のために貢献しようとする人
〔求める要素：協働性，幅広い視野，創造性〕

図 2　全学 AP

● 各学部，学科（専攻）でどのような人物を育成するか。

● 求める人物像〔高等学校等で修得すべき具体的な内容を含む〕
入学者に求める能力や資質（学力の 3 要素を含めたもの）は何か。

● 入学者選抜の基本方針
各々の入学者選抜（一般入試，特別入試<AO 入試・推薦入試>）[5]でどのような力を評価するか。

● 入学者選抜方法における選抜内容
各々の入学者選抜でどのような評価方法を活用するか，またその内容は何か。

● 入学者選抜方法における重点評価項目〔入学者選抜方法と求める人物像との関係性〕
各々の入学者選抜方法でどのような力に比重を置くか。

図 3　学部 AP の構造（2018 年度入試）[4]

2. 学部 AP 実質化と追跡調査による検証

2.1 AP 作成シートの活用による学部 AP 実質化

AP 作成シート（図 4）は，現行の選抜が AP との整合性が担保されているかについて，紙面上で確認できる仕様となっていることが特徴である。

図 4「①」では，各学部における従来の AP の転用に加え，CP，DP を踏まえて簡潔に作成するよう各学部に依頼した。

本シートのポイントは，「②」「③」である。「②」においては，学力の 3 要素と CP，DP を踏まえて，各学部が求める能力や資質を 5 観点もしくは 6 観点で策定するよう依頼し，それぞれの観点に定義づけを行った。「②−1」は，全学部が従来から AP に示している「高等学校等で修得すべき具体的な内容」をあらためて確認する機会となった。そして，「③」においては，「入学者選抜方法等」の縦軸に既定の選抜方法，横軸に求める人物像の観点をすべて記載し，該当の選抜方法で何を重点的に評価しているかに〇印を記入することを依頼した（完成形は，図 1 の生物資源産業学部の例，後述の図 5 の理工学部の例を参照）。学部からは，「求める人物像」に示した〇印を見ることで，現行の選抜方法を改良する必要があるといった意見や，新たな選抜方法を課す必要があるなどの意見があがった。結果，現行における選抜の改良・改革へと繋がり，AP 実質化に役割を果たした。

具体的な事例としては，本学の理工学部で AP 作成シートを有効的に活用したことにより，「推薦入試Ⅰ」「推薦入試Ⅱ」で入試変更に繋がったことである。ここでは，「推薦入試Ⅱ」の入試変更を取りあげる。

図 5 は，理工学部の 2018 年度・推薦入試Ⅱで公表している選抜方法と求める人物像の関係性である。前年度の 2017 年度入試で，AP 作成シートを完成させた際には，図 5 の網掛けで示している「活動報告書」を採用しておらず，当学部の求める人物像の「主体性・創造性・協働性」（以下，「主体性ほか」と略す）を調査書のみで評価していた。当時，図 5 で示した「主体性ほか」の〇印は，調査書の 1 つのみであった。推薦入試の性質から，本学部と筆者の所属するアドミッション部門で「主体性ほか」をより丁寧に評価するには，調査書に加えて，何らかの選抜方法が必要ではないかと AP 作成シートを見ながら議論が持ち上がった。そこで，「主体性・多様性・協働性」等の評価にも比較的適している「活動報告書」（井上ほか，2017）を導入して，2018 年度入試より，本人が作成する資料と調査書を複合的に活用する選抜に転換した。同時に，本学部においては，活動報告書を評価するにあたり，図 5 で示した「関心・意欲・態度」「主体性ほか」の重点評価項目に基づいた評価指標の開発が開始された。審査体制も活動報告書で何を評価するかが重点評価項目の設定により明確化されたことで，AP に基づいた個別選抜改革を実現させることとなった。よって，この AP 作成シートの活用によって，これまでの入学者選抜の振り返りと課題抽出を図ることに貢献することとなり，大きな役割を果たしている。

横軸：重点評価項目＝求める人物像（AP）

縦軸：選抜方法＝多面的・総合的評価

	関心･意欲･態度	表現力	知識･教養	思考力･判断力	主体性・創造性・協働性
(センター試験)			○	○	
個人面接	○	○	○	○	
志望理由書	○	○			
活動報告書	○				○
調査書	○				○

図 5 本学理工学部における選抜方法と求める人物像の関係性（2018 年度入試）
※推薦入試Ⅱ（セ課す）の選抜方法のみ抽出

さらに，対外的に本 AP を活用することにも役割を果たしている。具体化した AP 公表後に，ある高等学校から総合科学部の「推薦入試Ⅰ（英語能力重視型）」に関する質問が寄せられ，本 AP を活用して明確な回答ができたことである。質問内容は，「英語によるスピーチを含む個人面接において，英語能力（特に話す）を問う選抜を実施しているが，当選抜は英語の知識を問うことはあるのか」というものだ。本シートのポイントである「③」重点評価項目を示して，「英語の知識を問うことに重点は置いていない（「知識・教養」に〇印を付していない）」と明確な回答をした。入学者選抜は秘匿性の高い性質であり，進学相談会等の質問に対してどこまで回答するかを念頭に置かなければならない。その線引きとして，本 AP は可能な仕様でもあり，対外的にも本 AP は有効的に活用されている。

「④」においては，各選抜区分単位で，入学者選抜の基本方針を明確に示すよう各学部に依頼した。まず，記載ルールとして，「③」の表を選抜区分単位で文章

① 学部・学科（専攻）AP ※CP，DP を踏まえて作成

学部 AP	
学科 AP	
専攻 AP	

② 求める人物像 ※5 観点もしくは 6 観点を基本とし，学力の 3 要素と CP，DP を踏まえて作成

求める人物像	定義
★	
★	
★	
★	
★	
★	

②−1 高等学校等で修得すべき具体的な内容 ※「知識・教養」に紐つける

教科等	具体的記述

③ 入学者選抜方法における重点評価項目（入学者選抜方法と求める人物像との関係性）

入学者選抜方法等	該当選抜区分	★	★	★	★	★	★
(センター)							

④ 入学者選抜の基本方針

選抜区分	呼称（一般は不要）	入学者選抜の基本方針
一般（前期）	—	

⑤ 入学者選抜方法における選抜内容

入学者選抜方法	該当選抜区分	選抜内容

図 4 AP 作成シート 「★」印は，求める人物像の観点であり，「②」と「③」を紐つけている。
※入学者選抜の公平性への配慮と紙幅の都合により，一部内容を改変した。当シートの各学部の完成形は，徳島大学入学者選抜要項（2018）を参照のこと。

として書き起こすことのみを共通化し，後の記述は各学部の判断に委ねた。特に，推薦入試Ⅰ・推薦入試Ⅱ，アドミッション・オフィス入試（以下，AO 入試と略す）など一般入試を除く選抜区分においては，各選抜区分で何を重視するか，あるいはどういう学生を求めているかについてより受験生に理解を促すため，呼称を記載することを求めた。このことは，各学部で意欲的に発案する動きに繋がり，選抜の改良ないし新しい選抜の開発へ導いた。例えば，本学で初となる AO 入試が，2018 年度入試より薬学部薬学科， 創製薬科学科で導入された。その工程では，AP 作成シートを活用し，「④」において，薬学科は「インタラクティブ YAKUGAKUJIN [6]・『操薬（薬をあやつる）』リーダー育成型」，創製薬科学科は「インタラクティブ YAKUGAKUJIN・『創薬』リーダー育成型」と個性溢れる呼称をつけたことにも繋がっている [7]。

「⑤」においては，具体的な選抜内容を可能な限り明記することを求めた。本内容は受験生が必要な情報であることが明らかである。進学相談会等でも，各選抜方法の具体的な内容に関する質問が多い実状でもあるからだ。また，公正な選抜を実施するには，具体的な選抜内容を明らかにする必要があるとも考えている。

以上により，AP 作成シートは，AP を各選抜方法と評価方法へ機能させる基盤となったことから，AP 実質化に繋がった。

2.2 「追跡調査」による入学者選抜改革の検証

「入学者選抜改革において，AP を各選抜方法と評価方法へ機能させることができているか」に対する評価及び検証の 1 つの観点として，入学後の学生のパフォーマンス（学習，課外活動）の変容の分析がある。そこで，「徳島方式」の実証の場である生物資源産業学部では，当学部学生のパフォーマンスの様を捉えるために「生物資源産業学部追跡調査ワーキング」を立ち上げ，追跡調査を開始した。ワーキングメンバーは，アドミッション部門専任教員と当学部教員，そして，高等教育の知見をもつ教員で構成された。

生物資源産業学部の AP に挙げた「求める人物像」は，「関心・意欲・態度」「探究力」「表現力」「知識・教養」「思考力・判断力」「協働性」である。「徳島方式」で示される，「選抜方法と求める人物像の関係性」（図 1）からも明らかなように，当学部では，各選抜区分に対する「求める人物像」の能力の重要視する点が異なっている。さらに，当学部の入学者選抜では「多面的・総合的評価」を全ての選抜区分に取り入れている。よって，学生のパフォーマンスの評価においても，一様な評価による結論付けではなく，多面的な評価軸を設定し，総合的な視点をもつことは重要と考える。

追跡調査の項目には，入学者選抜に関するデータ類と入学から卒業までの GPA・GPT などの成績，そして，これらに加え「学びの設計書」の評価結果，「追跡質問紙調査」による調査内容を設定した。そして，これら調査内容を総合して分析を行うこととした。

「学びの設計書」は「自分がこれから学びたい分野について」を示すものである。当学部の入学者選抜は，推薦入試（推薦Ⅰ，推薦Ⅱ）で「学びの設計書」を取り入れ，「学びの設計書」では「探究力」「表現力」を重点的に評価している（図 1）。「学びの設計書」は，これら評価観点も含め，入学者選抜だけでなく，入学後の学生に対しても有用であると考える。自分の専門性を深め，社会人までをつなぐ学び方を設計し，人に明確に示すことに用いることができる。つまり，学生に対する教育の面で有効に活用可能なものである。そこで「学びの設計書」を通して，入学者選抜時からの学生の変容を捉える要素を得ることとした。

「追跡質問紙調査」は，GPA・GPT といった成績や「学びの設計書」から直接得ることのできない，学生の学びの様子と課外活動の関連データを得ることができる。そこで，質問内容は，当学部の CP と DP を踏まえたものとし，学生の大学での学びへの意識と実態，生活面に関する項目とした。また，1 年生に対しての質問には，大学入学までの学びや生活に関連する内容も取り入れており，入学前の学習方法や学びへの取り組み方や意識の変化との関連についても分析可能なものとした。回答方法は，4 年間の学生の変容を捉えやすくするために，自由記述ではなく選択式とした。

既に，当学部 1 期生となる学生を対象にした「学びの設計書」及び「追跡質問紙調査」の第 1 回目は 2017 年 2 月 16 日に実施し，追跡調査が実行に移されていることを報告しておく。

3 まとめ

「徳島方式」は，全学において AP 具体化そして実質化に繋げた事例として挙げたものである。先行実施した生物資源産業学部を実証の場とし，モデルとなったことで，「徳島方式」の全学展開をスムーズに運ぶことができた。

「高大接続システム改革会議『最終報告』」（2016）においては，個別大学における入学者選抜改革の基本的な考え方の中で，入学者受入れ方針と具体的な評価方法との関係など，責任を持って説明する

必要性が示されており，「徳島方式」は，AP を用いて，受験生や高等学校に明確な説明を実施できるという対外的な利点がある。

また，「徳島方式」は，「AP 作成シート」により AP の実質化を図ったことで，学内で選抜の改良ないし改革の機運が高まりつつあること，そして，入学者選抜の具体的な出題を検討する際に，出題内容が AP と関連性が担保されているかどうかの確認機能の役割を果たせることである。

今後も引き続いて，追跡調査による入学者選抜改革の検証を行うとともに，常に振り返ることにおいても機能を果たす「徳島方式」を活用して，組織活動・研究活動に励むところである。

注

1) 「徳島方式」の呼称は，生物資源産業学部の個別選抜改革後の第 3 期中期目標・中期計画策定時から用いている。
2) 当関係性は，2018 年度入試の内容を記載した。各選抜方法の具体的な内容等については割愛している。なお，図 1 内で，○印を付している重点評価項目（求める人物像）は，各選抜方法において，「重点的に」評価することを意味しており，○印を付していない項目を全く評価しないということではない。このことは，徳島大学入学者選抜要項においても明記している。
3) 全学共通教育センターは，2016 年 4 月より教養教育院に組織変更。
4) 本内容は，徳島大学入学者選抜要項の全学 AP 記載のページに「各学部，学科（専攻）の学生受入方針（アドミッション・ポリシー）について」と標題を示して，受験生等に具体的な説明を行っている。
5) 帰国子女特別入試，社会人特別入試，私費外国人留学生入試，渡日前入学許可制度による私費外国人留学生入試は，全学共通の AP を別途策定している。
6) 「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」は薬学部の造語であり，薬学が関係する諸分野の連携を基盤に，自らの活躍の場を積極的に開拓できる能力に溢れた人材と定義している。
7) AO 入試は，薬学部に加えて，2019 年度入試より医学部医学科で導入が決定される。そこでは，「四国定着研究医型」の呼称で 2 年前予告を実施している。

参考文献

中央教育審議会（1999）.「初等中等教育と高等学校との接続の改善について」（答申）

中央教育審議会（2014）.「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について」（答申）

中央教育審議会大学分科会大学教育部会（2016）.「『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー)，『教育課程編成・実施の方針』(カリキュラム・ポリシー)及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン」

井上敏憲，中村裕行，前村哲史，植野美彦，立岡裕士，岡本崇宅，大塚智子（2017）.「四国地区国立5大学共通のインターネット出願と多面的・総合的評価への取り組み」『大学入試研究ジャーナル』, **27**, 91-96.

高大接続システム改革会議（2016）.「高大接続システム改革会議『最終報告』」

文部科学省（2015）.「高大接続改革実行プラン」

文部科学省大学入試室（2015）.「現行の大学のアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）に関する資料」

西郡大（2014）.「実質的な活用に向けた『入学者受入方針』の見直し」『大学入試研究ジャーナル』, **24**, 113-119.

立脇洋介，山村滋，濱中淳子，鈴木規夫（2015）.「アドミッション・ポリシーをめぐる学生と教員の意識」『大学入試研究ジャーナル』, **25**, 57-62.

植野美彦（2017）.「徳島大学生物資源産業学部の個別選抜改革――高大接続改革実行プランを受けた多面的・総合的評価の設計と実施――」『大学入試研究ジャーナル』, **27**, 1-7.

謝辞

「徳島方式」は，2015 年度におけるアドミッション部門兼務教職員と各部局の入試担当教職員の協力なくしては実現できなかった。また，追跡調査においては，小山治先生（前本学インスティトゥーショナル・リサーチ室）に多くの助言をいただいた。関係各位に対して，心より感謝申し上げる。